

## 第3分科会 通常の学級における取組

### テーマ「一人一人の教育的ニーズに応じた指導の工夫」

#### 提案Ⅰ 「鳥取市立高草中学校校内通級指導教室の運営と課題」

##### ～Tルームの挑戦～

発表者	鳥取県 鳥取市立高草中学校	教諭	西上 静
司会者	鳥取県 米子市立五千石小学校	教諭	藤井 ゆか
助言者	香川県教育委員会 特別支援教育課	主任指導主事	稲田 典子

## I 実践に当たって

本校は、鳥取県の東部に位置する全校生徒約260名の中規模校である。校区内にある四つの小学校の規模はそれぞれ異なり、うち2校は小規模校転入制度を有している。本校の昨年度不登校出現率は、鳥取市4.0%に対し、6.5%と非常に高く本校の重要課題の一つとなっている。要因は様々だが、経済的な理由や家庭環境などから基本的な生活や学習習慣が身に付いていない、十分な学習環境が担保されていないといった生徒も多く、自己肯定感や将来の夢・希望をもって学校生活を送る生徒の割合が低いことが学校評価アンケートの数値にも表れている。また、授業内容を理解できないから学習意欲が保てない、基礎学力が定着していないために更に授業内容が理解できないといった悪循環もあり、特別な支援や個別の支援を要する生徒の割合も非常に高く保健室利用数や問題行動の発生件数もここ近年までは多かった。

そこで、学校生活において様々な理由から集団における学習に取り組みづらい生徒に対し、心の安定を図りながら生活と学習面での指導支援を実施するために校内体制の中で通級のような教室が作れないかという教員の思いから「校内通級指導教室」(Tルーム)を置くことにした。令和元年度7月に開設したこの「Tルーム」は、今年度3年目を迎える。本年度は、8月末現在5名の生徒を対象に取り組んでいる。

## II 実践内容

### Ⅰ 「Tルーム」の運営について

#### (1) 対象者と指導のねらい

この「Tルーム」は、学校には登校していて、生徒指導上の問題行動はないものの、授業中に何もせず黙ったままだったり、友達や先生との関係を築きにくかったりする生徒を対象とし、心理的に開放させ不登校の未然防止につなげていくことを目的としている。集団の学習に何らかの不安を抱える生徒に対しては、学習、生活、情緒の安定を図ることを目指し個別の指導を展開している。

#### (2) 対象者の決定

学年団を中心に複数人をリストアップした後、「Tルーム運営委員会」で各学年2名程度にしぼり、本人及び保護者の了解が得られたら指導を開始することになっている。

#### (3) 指導形態と指導内容

Tルーム担当者による1対1の個別指導を基本とし、生活や情緒の安定のた

めに傾聴と共感を第一に考え、個々の課題に応じてソーシャルスキル、リフレーミング、アンガーマネジメントなどの指導を継続的に行っている。また、必要と認められた場合、学習スキルの習得や基礎的内容の指導も行っている。

(4) 指導時間と指導期間

週1時間、生徒の希望を考慮して時間割を決定し、本人及び保護者の同意の下、授業中に指導を行っている。期間は前後期それぞれで終了とするが本人及び保護者の希望や学級での適応状況により継続指導も可能としている。

(5) 指導に対する評価

指導後には、担任や学年との情報交換を行い、指導が学級や授業とつながるよう連携を図っている。また、実施記録簿をTルーム運営委員会の参加者、担任等に回覧し情報共有を行うとともに職員共有フォルダ内にて閲覧できるようにし、関係職員がいつでも生徒の様子を把握できるようにしている。学期末には生徒と担任にアンケートを実施し、学級懇談時には利用生徒の保護者懇談を行い指導の様子を伝えたり家庭での実態把握に努めたりしている。さらには、本校で定期的で開催している「生徒支援委員会」で状況報告を行い、学校全体での情報共有を通して日々の指導に反映させている。

(6) 運営

校内に「Tルーム運営委員会」を設置して運営を行っている。委員長は学校長、副委員長は教頭、事務局はTルーム担当者、構成員は教務主任、生徒指導主事、養護教諭、特別支援教育主任、各学年主任、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、LD等専門員、その他必要と認める者である。

2 実践例 Aさんの場合

(1) 実態と課題

授業中に何もせず、じっと座っているだけで、教師の声掛けを拒否するか、無言でやり過ごす。特定の生徒(1名)としか会話ができない。学級活動や班活動、行事など、集団活動へは受動的に参加、みんなと協力する、集団に貢献したいなどの意欲は低く、自己肯定感がもちにくい。欠席や遅刻・早退が目立っていた。

(2) 指導の方針

- ① 他者とのコミュニケーションをとろうとする意欲をもつことができる。
- ② 自分の長所を知ること、自己肯定感を高めることができる。

(3) 指導の実際

○ ①についての指導内容

毎時間の導入時にはトーキングカード(様々な話のお題が書かれたカード)を用い、Aさんと指導者が互いの思いや考えを話す活動を行った。サイコロトーク(右写真:出た目の内容を話す)も互いの話を聞き合う活動として行った。指導に際しては、肯定的に受け止め、傾聴することに努めた。



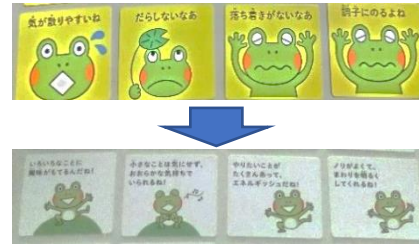
〈トーキングカード〉

○ ①についての変容

授業中に教師の声掛けに応じるようになった。3年生になると、本音で話をするが増えた。担任や学年の教師との会話が増え、特定の生徒以外との関わりが徐々に見られるようになった。終学活の1分間スピーチでは、お題に対する自分の考えをみんなの前で発表した。運動会や文化祭の練習にも休むことなく参加し、学級の中で思い出を残すことができた。「自分の話をきちんと聞いてくれる人が学校にいる」と実感できるまで意識が変化したと感じている。

○ ②についての指導内容

かえるカード（右写真マイナスの言葉をプラスに捉える言葉が裏に書いてあるカード）を用いて、自分のネガティブな考え方についてAさんの見方を変えながら性格傾向分析を行った。またAさんが話す様々なネガティブな行動や考え方について、ポジティブに捉えられるようにAさんの見方を変えて伝えるよう努めた。特に、進学に関しては情報提供も含め、Aさんが何かの可能性について気付けるように見方を変えながら伝えた。



〈かえるカード〉

○ ②についての変容

Aさんは2年生まで、高校進学を希望していなかった。「自分の長所が分からない」「悪いことはたくさん言われてきたけど、良いところはない」と言うほど自分をネガティブに捉えていた。指導が1年経つあたりから、自分にも進学のチャンスがあることに気付き始め、「高校生になりたい」という前向きな気持ちをもつことができるようになった。

(4) Aさんの指導の成果

- ・アンケートに「学校に行く楽しみが増えた。去年よりも本音で話せるようになった。話したい内容が増えた」と自分自身の変容について振り返っている。
- ・Aさんの欠席日数 2年16日→3年6日（通院2、病欠欠席3、事故欠席1）
- ・家族や担任の支えもあり、希望の高校へと進学できた。「中学校生活で一番頑張ったことは面接練習」「高草中の先生はいい先生が多い。高校でも本音で話せる先生がいたらいいな」とコメントしたことからも、自分を受け止めてもらい、親身に指導してくれる大人が実は周りにたくさんいることに気付けたのだと思う。Tルームでの指導でAさんの心を開くことができたと感じている。

### Ⅲ 成果と今後の課題

Ⅰ Tルーム利用アンケートより

前期と後期の指導期間の終わりにTルーム利用前後の変容について生徒と担任にアンケートを実施している。以下はその一部である。

<生徒>・Tルームがある日は学校に行くのを頑張ろうと思えた。

・Tルームに行かなかつたら高校に合格しなかったと思う。

<教師>・Tルームで学んだ方法で学習しようとする姿が見られ、学び方を一緒に考えてもらうことで自分に合った学習方法を知ることができた。

- ・顔を上げて教師の話聞く態度が見られるようになり、学習に取り組む姿勢が変わってきた。時間は掛かるが継続により前進していくと思われる。
- ・Tルームでの活動を終えて教室に戻ってくると、いつも生き生きとした良い表情をしており、リラックスして活動を楽しんでいたのだと感じられた。

## 2 成果

生徒の実態や事情は様々で、その変容にも差はあるが、利用時には明るい表情で話をする生徒が多い。前年度から継続している生徒の中には、欠席日数が減ったり、学習や学級の活動に自ら取り組みたりする生徒もいる。また、少しずつではあるが自分のことや考えを言える場面が増えてきている姿が見られる。さらに、複数の教師が生徒の状況を十分に把握した上で適切に関わることもできるので、生徒自身が安心感をもって学校生活を送ることができるなどの効果も見られている。

## 3 課題

週に一度の指導を継続する中で、Tルームが生徒のよりどころとなる場だけでなく、学級や授業の中で主体的な活動に結び付けていくための時間となるように指導内容を模索することが今後の課題だと感じている。また、学校不適応を起こす可能性のある生徒をピックアップする上で、優先順位がつけづらいことやTルームと各関係機関との役割を明確にしていくことも必要である。なお、このTルームの運営自体は、校内体制の中で行っている取組であることから、指導者の時数の確保も重要なポイントであると思われる。

### 〈指導・助言〉

学校生活で学習意欲が低い生徒に対する学びの場として、校内通級指導教室（Tルーム）を活用し、心の安定を図りながら学習面の指導を行うことで、生徒の自己肯定感を高める取組になっている。通級による指導では、個別の指導で学んだことが在籍学級や授業で生かされるために、教職員間の情報共有が重要である。本提案では学年団会、Tルーム運営委員会等を情報共有の場とするとともに、生徒、担任のアンケート、保護者からの家庭での情報をTルームでの指導の評価の機会とすることで、生徒の教育的ニーズに応じた適切な支援につなげることができている。

Tルームの指導では、自己コントロール力の回復やコミュニケーション能力の育成、学習スキルの獲得等を通じて困難さの改善に取り組んでいるが、他にも自分で心や体の緊張を取るリラクゼーション法なども効果的と思われる。

課題として、通常の学級での主体的な活動に結び付けていくための時間となるようなTルームでの指導内容の検討について触れられているが、そのためには、生徒の願いを学習活動に反映させることで意欲化を図ることが望まれる。また、障がいの状態に応じた指導内容や指導方法の工夫を、組織的かつ計画的に行えるよう、保護者と連携して個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、それに沿った指導を行い、通常の学級においては分かりやすい授業を工夫することが大切である。また、学校不適応の可能性のある生徒の義務教育終了段階における進路指導は重要である。Tルーム担当者がSCやSSWと連携を図りながら、保護者や本人の状況を十分に把握し、困難さのある生徒の実態把握に努めるとともに、医療、福祉などの社会資源の活用についても検討し、地域における支援の場を広げることが望まれる。